

今度ははっきり言えた

ベンチに座って、ひたすら電車を待った。
電車が来ると、僕は体を固くして乗った。
電車は京都競馬場を通りすぎ、八幡駅に近づいた。

電車が木津川鉄橋にさしかかった時、
すごい騒音とともに、次から次と、
くぐる鉄橋の鉄骨が不気味に見えた。

電車の窓から見ると、はるか向こう、
国道橋の下で、川で水浴びする若者や
家族づれがたくさん水浴びしているのが
見えて、ほっとした。

僕も小さい時よく来た八幡水泳場だ。
お店がいっぱい出ている。

八幡の駅で、人がどっと降りた。

僕もそれに流されて降りた。

八幡町の駅は、家族づれでいっぱい。

八幡の町に来たのは小学校四年の時以来か。
あの頃の印象が強くて、
まるで別の町に来た様だ。

「こんな町並みだったかな。」

何となく落ち着かない。

周囲をキョロキョロ見渡す。

やめようとしても、

なかなか体が言う事をきかない。

どこに家があるのか僕は知らない。



508